

ウズベク語における推定・可能性を表す分析的表現の差異

— *V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* に注目して—

Differences between the Uzbek Analytical Expressions
for Assumption, *V-sa kerak*, and Possibility, *V-(i)sh mumkin*

日高 晋介

HIDAKA Shinsuke

When a native speaker of Uzbek (Turkic, Southeastern branch) assesses a particular proposition, he or she uses either *V-sa kerak* or *V-(i)sh mumkin* (*V* = verb stem). Earlier studies described *V-sa kerak* as expressing contemplated actions (Bodrogligeti 2003: 876), doubt/anxiety (Abdurahmonov et al. 1976: 110), and presumption (Kononov 1960: 398), whereas *V-(i)sh mumkin* expressed possibility (Bodrogligeti 2003: 853, Kononov 1960: 401) and permission (Kononov 1960: 401). Kononov (1960: 401) cites an example that can be interpreted as potential. Data from Hidaka (2013) suggest that *V-(i)sh mumkin* has a lower probability than *V-sa kerak*. However, the aforementioned studies have not examined the morpho-syntactic features in either expression; this study analyzes and considers both expressions from the same viewpoint. First, we clarify the morpho-syntactic features associated with semantic features in a corpus examination from the viewpoint of “subjectivity” (Palmer 1986: 16). In addition, we explored both expressions in an interview with a native speaker from another semantic viewpoint (probability) that is different from subjectivity. Our study concludes that the degree of subjectivity is related to these differences. *V-sa kerak* is used when the speaker judges that a proposition is true. This form has a higher degree of subjectivity. However, *V-(i)sh mumkin* is used when the speaker’s proposition may be true or false. This form has a lower degree of subjectivity.

キーワード： チュルク諸語、ウズベク語、認識的モダリティ、推定、可能性

Keywords: Turkic languages, Uzbek, Epistemic modality, Presumption, Possibility

1. はじめに

ウズベク語 (チュルク諸語南東語群) において、話者が「今日雨が降る」という命題に対して予測を述べる際に、述部に *V-sa kerak* (1) あるいは *V-(i)sh mumkin* (2) という形式のいずれかが用いられる。

- (1) *Bugun yomg'ir yog'-sa-ø kerak.* (2) *Bugun yomg'ir yog'-ish-i mumkin.*
 today rain rain-COND-3 necessary today rain rain-VN-3.POSS possible
 「今日、雨が降るだろう。」 「今日、雨が降るかもしれない。」

先行研究では、*V-sa kerak* は、予期された動作 (Bodrogligeti 2003: 876)、疑い・心配 (Abdurahmonov et al. 1976: 110)、推定 (Kononov 1960: 398) を表すと記述されている。他方、*V-(i)sh mumkin* は、可能性 (Bodrogligeti 2003: 853, Kononov 1960: 401)、許可 (Kononov 1960: 401)、と記述されている。可能を表すと解釈できる例も挙げられている (Kononov 1960: 401)。日高 (2013: 480-481) によるデータによれば、*V-(i)sh mumkin* のほうが *V-sa kerak* よりも低い蓋然性を表すことが示唆されている。ただし、上記の先行研究では、2 つの形式の形態統語的な特性については指摘がない。本稿では、両者を同一の基準で分析・考察する。まず、コーパス調査にて、「主観性」(Palmer 1986: 16) という観点から、両者の形態統語的な特性に連動する意味的特性を明らかにする。さらに、コーパス調査で着目した意味的特性とは異なる観点 (蓋然性) から聞き取り調査を行うことで、*V-(i)sh mumkin* と *V-sa kerak* について分析・考察する。本稿は次のように結論付ける: 2 つの形式の意味の違いには、主観性の度合いが関わっている。*V-sa kerak* は、話し手がその命題を真であると考えている場合に用いられる形式であり、かつ主観性の度合いが高い形式である。一方、*V-(i)sh mumkin* は、話し手にとってその命題が真偽両方である可能性を表す場合に用いられる形式であり、かつ主観性の度合いが低い形式である。

本稿の構成は、次の通りである。2 節で、*V-(i)sh mumkin* と *V-sa kerak* の構成要素について述べ、先行研究を概観し、問題提起を行う。3 節でコーパス調査について、4 節で聞き取り調査について、それぞれ述べる。5 節で結論を述べる。なお、本稿における例文番号・グロス・日本語訳・下線などの文字飾りはすべて筆者によるものである。

2. 先行研究と問題提起

2.1 節で、*V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* の構成要素について説明し、Abdurahmonov et al. (1976), Kononov (1960), Bodrogligeti (2003) による *V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* の記述を概観してから、日高 (2013) によるデータを整理し、両者が表す蓋然性について述べる。2.2 節で、先行研究の問題点を述べ、問題提起を行う。

2.1. 構成要素と先行研究概観

まず *V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* の構成要素について、それぞれ述べる。*V-sa kerak* の *V-sa* は動詞の条件形であり、*kerak* は「必要な、必要である」という意味を表す形容詞 (3) である。(4) のように、名詞的にも機能しうる。所属人称接尾辞は、属格名詞句の数および人称と一致し、主要部名詞に付く。(4) では、属格名詞句 *bor-ish-ning* の数・人称と一致した三人称所属人称接尾辞 *-i* が *kerak* に付いている。

- (3) *kerak narsa*
 necessary thing

「必要なもの」(中嶋 2015: 108)

- (4) *U yer-ga bor-ish-ning kerag-i yo'q.*
 that place-DAT go-VN-GEN necessary-3.POSS no

「その場所へ行く必要はない。」(中嶋 2015: 108)

V-(i)sh mumkin の *V-(i)sh* は動名詞であり、*mumkin* は「可能な、可能である」を意味する形容詞である。(5) では、*mumkin* が *narsa* 「こと、もの」を連体修飾している。(4) の *kerak* のように名詞的には機能しない。

- (5) *Qirg'iziston-da mumkin narsa O'zbekiston-da mumkin emas.*
 Kyrgyzstan-LOC possible thing Uzbekistan-LOC possible NEG

「キルギスでできることは、ウズベキスタンでできない。」

(<https://www.amerikaovozi.com/a/6844018.html> [最終閲覧日: 2023/02/15])

先行研究によれば、*V-sa kerak* は、予期された動作 (Bodrogligeti 2003: 876)、疑い・心配 (Abdurahmonov et al. 1976: 110)、推定 (Kononov 1960: 398) を表すと記述されている。先行研究には、動詞語幹に否定 *-ma* が続く例 (7) は見られるが、*kerak* の後には否定要素が続く例は見られない。

- (6) *Qo'rq-qan bo'l-sa-ø kerak! — de-di-ø ohista Pavel.*
 be.afraid-PTCP.PAST be-COND-3 necessary say-PAST-3 quietly PN

「『怖かっただろう!』とパベルは静かに言った。」(Abdurahmonov et al. 1976: 110)

- (7) *Domla-miz bizniki-ga kel-ma-sa-ø kerak.*
teacher-1PL.POSS our.place-DAT come-NEG-COND-3 necessary
「私たちの先生は私たちのところに来ないだろう。」 (Bodrogligeti 2003: 878)

V-(i)sh mumkin は、可能性 (Bodrogligeti 2003: 853, Kononov 1960: 401)、許可 (Kononov 1960: 401) を表す、と記述されている。可能を表すという記述はないが、可能として解釈できる例 (Kononov 1960: 401) もある。可能性の例は (8) を、許可の例は (9) を、可能の例は (10) を、それぞれ参照されたい。

- (8) *U-nda ochlik-dan o'l-ish mumkin.*
3SG-LOC starving-ABL death-VN possible
「それで、飢えが原因で死ぬかもしれない。」 (Bodrogligeti 2003: 855)

- (9) *Mashina tayyor. Jo'na-sh-ingiz mumkin.*
car be.ready leave-VN-2PL.POSS possible
「車が準備できている。あなたは出発できる。」 (Bodrogligeti 2003: 855)

- (10) *Bu ish-ni ikki kun-da bajar-ish mumkin.*
this work-ACC two day-LOC carry.out-VN possible
「この仕事は2日でできる。」 (Kononov 1960: 401)

本稿では、許可 (9) と可能 (10) を表す例は対象としない。

V-(i)sh mumkin は、2パターンの否定を持ち、それぞれ異なる意味が表される: 1. 否定動名詞 *V-maslik* 「Vしないこと」に *mumkin* を続けることで、動作を実行しない可能性が表される (11)、2. *V-(i)sh mumkin* の後に *emas* 「～ではない」を用いることで、不許可・不可能が表される (12)。したがって、本稿では2.のパターン、つまり、*mumkin* に *emas* が続くパターンは対象外とする。

- (11) *V-maslik mumkin*
V-VN.NEG possible
「～しないかもしれない。」 (Kononov 1960: 401)

(12) *Lekin bu kecha bor-ish mumkin emas, chunki...*

but this night go-VN possible NEG because

「しかし、今夜...行けない、なぜなら...」(Kononov 1960: 402)

日高 (2013) はウズベク語の例文データ集である。例文は、風間 (2011) による日本語の調査文をウズベク語母語話者が翻訳したものである。本稿ではモダリティに関するデータ (2.3 節; pp.447-484) のみ挙げる。本稿に関する部分のみ挙げると、「~だろう」と「~のではないか」は *V-sa kerak* で翻訳され ((13), (14))、「する/しないかもしれない」は *V-(i)sh/V-maslik mumkin* に翻訳されている (15)。

(13) 「(あの人は) 今日 はたぶん来ないだろう。」

U odam bugun kel-ma-sa-ø kerak.

3SG person today come-NEG-COND-3 necessary

(14) 「彼らがまだ来ないなんて、きっと途中で車が壊れたんじゃないか。」

Ular hali ham kel-ma-yap=ti, balki mashina-lar-i yo'l-da

3PL yet also come-NEG-PROG=3 perhaps car-PL-3.POSS way-LOC

buz-il-gan bo'l-sa-ø kerak.

break-PASS-PTCP.PAST become-COND-3 necessary

(15) 「さあ、(昼間だからあの人は家に) いるかもしれないし、いないかもしれない。」

Hozir tushlik vaqt-i bo'l-gan-i uchun, u odam

now noon time-3.POSS become-PTCP.PAST-3.POSS because 3SG person

uy-da bo'l-ish-i ham bo'l-maslig-i ham mumkin.

home-LOC become-VN-3.POSS also become-NEG.VN-3.POSS also possible.

風間 (2011: 40-41) は、確信「~はずだ」、推量「~だろう」、疑念「~のではないか」、可能性「かもしれない」の4つを指して、これらは広い意味で蓋然性を表す表現であり、話者には確信 > 推量 > 疑念 > 可能性の順に実現可能性が低いと感じられているとみなせると述べている。(16) に、ウズベク語の蓋然性を表す例文 (日高 2013: 480-481) を、風間 (2011) に即して整理して示す。(16) では、*V-sa kerak* が *V-(i)sh mumkin* よりも高い蓋然性を表すことが示唆されている。

(16) 風間 (2011) に即した、ウズベク語の蓋然性を表す形式の整理:

確信	推量・疑念	可能性
<i>V-(i)sh kerak</i>	> <i>V-sa kerak</i>	> <i>V-(i)sh/V-maslik mumkin</i>
「～はずだ」	「～だろう」(13)	「する／しないかもしれない」(15)
	「～のではないか」(14)	

2.2. 問題提起

V-sa kerak と *V-(i)sh mumkin* は、(1) と (2) のように、ある命題に対する話者の予測を表す。先行研究では、それぞれ異なる意味を持つことが指摘され ((6)～(10))、(16) に示したように両者が表す蓋然性の度合いも異なっているようである。先行研究では、それぞれの形式について、意味の記述はあるものの、形態統語的な特性については記述がない。本稿では、2つの形式について、同一の基準で分析・考察することで、形態的特性に連動した意味的特性を明らかにする。

本稿では、「主観性」(Palmer 1986: 16) という観点から、*V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* の用例を分析・考察し、さらに「主観性」とは別の観点(蓋然性; cf. (16)) から、両者の意味的な特性を明らかにする。

Palmer (1986: 16) は、モダリティは話者の主観的な態度と意見を文法化させたものであると定義できると述べている。したがって、主観性は、モダリティにおいて形式の選択に関わる概念であると言える。例えば、澤田 (2006: 44) は Palmer (1983: 208ff., 1986: 16-17) による記述をもとに、次の例を挙げている。

(17) *It may rain.*

(18) *It is possible that it will rain.*

澤田 (2006: 44) は、(17) の *may* は、(i) 「もしかしたら雨になるかもしれない」という、未来の降雨という事象に関する話し手の推量 (= 主観的な認識的モダリティ) と、(ii) 「雨になる可能性がある」という未来の降雨に関する可能性の存在 (= 客観的な認識的モダリティ) とに多義的であるとされるが、(18) の *It is possible* は「客観的な認識的モダリティ」しか表さないという、と述べている。

日本語においても、金田一 (2004 [1953]) が、日本語の助動詞「う」「よう」「まい」「だろう」は、感動助詞「よ」「わ」「さ」と同じように、終止形のみを持つこと、かつ文末にのみ位置することを根拠に、話者の発話時の心理を主観的に表現する、と述べている (金田一 2004 [1953]: 338)。

筆者は、認識モダリティにおける形式の選択に主観性が関わっており (Palmer 1983:

208ff., 1986: 16-17, 澤田 2006: 44)、モダリティを表す形式の形態統語的な特徴が「話者の発話時の心理を表す」という主観性に関わっていると考える(金田一 2004 [1953]: 338)。本稿では、3 節で、コーパス調査から得られた用例を形態統語的観点から分析し、*V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* のそれぞれが表す主観性の度合いから考察する。さらに、4 節で、(16)にて示唆された蓋然性の観点から聞き取り調査を行うことで、主観性とは別の観点から、両形式の意味的な特性を明らかにする。

3. コーパス調査

コーパス調査では、*V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* の前接要素と後接要素、つまり形態統語的な特徴に注目して分析を行う。2.2 節で先述したように、金田一 (2004 [1953]: 338) では、日本語の助動詞のうち、過去形を持たず、文末でしか用いられないものが主観的であるとされた。つまり、主観性の高低にはモダリティを表す形式の形態統語的な特徴が関わっているとと言える。

本稿の調査には、Sketch Engine (<https://www.sketchengine.eu/>) に所収されている *Turkic web – Uzbek* というウェブコーパスを用いた。このコーパスは 2012 年 1 月に .uz ドメインのウェブページからデータを集積したものであり、のべ語数は約 1800 万語である。

用例検索は、次の手順で行った。*V-sa kerak* の場合: 1. Concordance にて、kerak* で検索する。2. 検索範囲を kerak の前 3 語に設定し、*sa*で絞り込み検索する。3. 対象外の用例を確認後、同様の例を検索し、除外する。*V-(i)sh mumkin* の場合: 1. Concordance にて、mumkin* で検索する。2. 検索範囲を mumkin の前 3 語に設定し、*sh*で絞り込み検索する。3. 対象外の用例を確認後、同様の例を検索し、除外する。

表 1 に、コーパス調査から抽出した用例数の一覧を挙げる。*V-(i)sh mumkin* の用例数には可能・許可の例が含まれ、*V-maslik mumkin* には二重否定の例 *V-maslik mumkin emas* 「～しないことはできない」が含まれる。

表 1: コーパスから抽出した用例数

形式	グロス	抽出数
<i>V-sa kerak</i>	V-COND necessary	1297
<i>V-ma-sa kerak</i>	V-NEG-COND necessary	534
<i>V-(i)sh mumkin</i>	V-VN possible	2974
<i>V-maslik mumkin</i>	V-VN.NEG possible	639

以降の小節にて、*V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* の前接形式と後接形式に注目して分析を行う。なお、本節以後、*V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* という表記は、動詞語幹の否定形式 (*V-ma-sa kerak* と *V-maslik mumkin*) も含みうることに注意されたい。

3.1. 前接形式

特筆すべきは、*V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* とともに、形動詞に *bo'l* を続けることで、動作のテンス・アスペクトが表し分けられていることである。*V-gan bo'l* [V-PTCP.PAST be-] 「Vした」の例は (19), (22) を、*V-(a)yotgan¹ bo'l* [V-PTCP.PROG be-] 「Vしている」の例は (20), (23) を、*V-{a/y}digan² bo'l* [V-PTCP.NPST be-] 「Vするようになる」は (21), (24) を、それぞれ参照されたい。

(19) *Bu ish-ni tajriba-li odam qil-gan bo'l-sa-ø kerak, ...*
 this work-ACC experience-PROP person do-PTCP.PAST be-COND-3 necessary
 「この仕事は経験のある人がやったのだろう、...」 (uzhurriyat.uz)

(20) *Siz-ni quyidagi savol-lar o'ylan-tir-ayotgan bo'l-sa-ø kerak:*
 2PL-ACC low-ADJLZ question-PL think-CAUS-PTCP.PROG be-COND-3 necessary
 「あなたを下記の質問が考えさせているのだろう :」 (dastur.uz)

(21) *Bu yigitcha-ning ism-i Aziz bo'l-ib quloq-lar-i shalpan,*
 this young-GEN name-3.POSS PN be-CVB.SEQ ear-PL-3.POSS drooping
bo'y-i naynovlig-i-dan uyal-ib buk-il-ib yur-adigan
 height-3.POSS lankiness-3.POSS-ABL be.shy-CVB.SEQ bend-PASS-CVB.SEQ walk-PTCP.NPST
bo'l-sa-ø kerak, ...
 be-COND-3 necessary

「この若者の名前はアジズで、彼の耳は垂れ下がり、背丈がひよろ長いことを恥じて身体を曲げながら歩くようになるだろう、...」 (viki.uz)

(22) *lekin ma'lum bir o'zgartirish-lar kirit-il-gan bo'l-ish-i mumkin*
 but certain one change-PL introduce-PASS-PTCP.PAST be-VN-3.POSS possible
 「しかし、特定のある変更が導入されたかもしれない。」 (blogger.uz)

¹ 子音終わり語幹には *-ayotagan*、母音終わり語幹には *-yotgan* が接続する。

² 子音終わり語幹には *-adigan*、母音終わり語幹には *-ydigan* が接続する。

(23) *To'g'ri, bu savol-ni juda varvaqt ber-ayotgan bo'l-ish-imiz mumkin*
 right this question-ACC very quickly give-PTCP.PROG be-VN-1PL.POSS possible
 「正しい、この質問をととても早くしているかもしれない。」 (infoteka.uz)

(24) *alohida tahdid-ni ro'y ber-ish ehtimolliq-i-dan kel-ib*
 special threat-GEN face give-VN possibility-3.POSS-ABL come-CVB.SEQ

chiq-adigan bo'l-ish-i mumkin bo'l-gan zarar aniqlan-a=di
 go.out-PTCP.NPST be-VN-3.POSS possible be-PTCP.PAST damage be.clear-NPST=3
 「特定の脅威が起こる可能性から生じうる損害が明らかになる。」 (infocom.uz)

3.2. 後接形式

3.2.1. コピュラ動詞 *e-* あるいは *bo'l-*

まず、本節における分析の前提を述べる。形容詞である *kerak* と *mumkin* は、コピュラ動詞 *e-* あるいは *bo'l-* をもとにした形式を後接することで、テンス・否定・接続形式を形成する。例えば、*kerak* に、コピュラ動詞 *e-* 由来の小詞 *edi, emas* あるいは *bo'l-* の条件形をそれぞれ後接させると、*kerak edi* 「必要だった」、*kerak emas* 「必要ではない」 *kerak bo'lsa* 「必要であるなら」となる。

次に、*V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* にコピュラ動詞が後接する場合について述べる。コーパスから抽出された *V-sa kerak* の例 (1831 例) の中で、コピュラ動詞が後接する例は 1 例もない。

一方、*V-(i)sh mumkin* では、コピュラ動詞が後接しうる。例として、*V-(i)sh mumkin* の過去時制の例 (25) と、*V-(i)sh mumkin* が連体節述語として用いられている例 (26) を挙げる。(25) では、*V-(i)sh mumkin* にコピュラ動詞の過去形 *edi* が後接することで、過去の可能性が表されている。(26) では、*V-(i)sh mumkin* にコピュラ動詞の過去形動詞 *bo'l-gan* が後接することで、*V-(i)sh mumkin* が連体節述語として機能している。なお、*V-(i)sh mumkin* が可能性を表し、かつ、*bo'l-* の条件形が後接する例はない。

- (25) ... *sog'liq-ni saqla-sh, transport va xizmat ko'rsati-sh soha-lar-i-da*
 health-ACC keep-VN transport and service show-VN field-PL-3.POSS-LOC
ham qiyinchilik-lar-ni yuza-ga keltir-ish-i mumkin edi-o.
 also difficulties-PL-ACC surface-DAT bring-VN-3.POSS possible PAST-3
 「…(前略)ヘルスケア、輸送、サービスの分野で問題を生じさせる (lit. 問題を表面
 に持ってくる) かもしれなかった。」 (ayol.uz)

- (26) *Davlat, jamiyat va shaxs-ga jiddiy ekologik, ijtimoiy va boshqa*
 state society and person-DAT serious ecologic social and other
zarar yetkaz-ish-i mumkin bo'l-gan ekologik xavf-lar-ni...
 harm bring-VN-3.POSS possible be-PTCP.PAST ecologic danger-PL-ACC
 「国家、社会、および個人に、深刻な環境的、社会的およびその他の害を及ぼすか
 もしれない環境リスクを…」 (meteo.uz)」

3.2.2. 文末小詞 =da [強調], =a [確認], =mi [疑問]

本節では3つの文末小詞に注目する。=daは「強調」(Bodrogligeti 2003: 1019-21)を表し、
 =aは「確認」(中嶋 2015: 159)を表すとされている。=miは諾否疑問の標識である。
*V-sa kerak*に、文末小詞 =da [強調]、=a [確認] が後接する例を挙げる。下記(27)と(28)
 の *V-sa kerak* には、=da [強調] あるいは=a [確認] が後接している。

- (27) *Nima-ni=dir tushun-ma-gan bo'l-sa-m kerak=da.*
 what-ACC=INF understand-NEG-PTCP.PAST be-COND-1SG necessary=EMPH
 「私は何かを理解しなかったでしょうね。」 (filmlar.uz)

- (28) *O'sha-nda qo'rq-qan bo'l-sa-ngiz kerak=a?*
 that-LOC be.afraid-PTCP.PAST be-COND-2PL necessary=CONF
 「その時、あなたは怖かったですか?」 (uzbekistonovozi.uz)

(29) では、話し手は小詞 =a [確認] なしで聞き手へ確認している。つまり、(29) は、
V-sa kerak 自体が聞き手への確認として機能している例と言える。

- (29) *Qorn-ing ham och bo'l-sa-o kerak?*
 stomach-2SG.POSS also open be-COND-3 necessary
 「(君の) お腹も空いているでしょう？」 (tongyulduzi.uz)

ただし、*=mi* [疑問] が後接する例は 1 例もない。

一方、*V-(i)sh mumkin* (2974 例) と *V-maslik mumkin* (639 例) の中で、上記の文末小詞=*da* [強調]、=*a* [確認] が後接する例はない。(30) に *=mi* [疑問] が後接する例を示す。

- (30) ... “*Osteoporoz: nasl-dan nasl-ga o't-ish-i mumkin=mi?*”
 osteoporosis generation-ABL generation-DAT pass-VN-3.POSS possible=Q
kabi qiziqarli maqola-lar-ni o'qi-sh-ingiz mumkin.
 like interest article-PL-ACC read-VN-2PL.POSS possible
 「(前略)『骨粗しょう症: 世代から世代へ受け継がれうるのか』というような面白い記事が読めます。」 (shou-biznes.uz)

3.3. 考察

本節では、3.1 節と、3.2.1 節から 3.2.2 節で述べたコーパス調査における結果の分析をまとめ、両形式の差異について議論する。表 2 に分析結果をまとめる。

表 2: コーパス調査における分析のまとめ

前節要素 形動詞 + <i>bo'l-</i>	形式	後接要素		コピュラ動詞 <i>e-, bo'l-</i>
		文末小詞 <i>=da</i> [強調]、 <i>=a</i> [確認]	<i>=mi</i> [疑問]	
○	<i>V-sa kerak</i> [V-COND necessary]	○	×	×
○	<i>V-(i)sh mumkin</i> [V-VN possible]	×	○	○

前節要素には、特に差異が見られないため、これ以降は考察の対象とはしない。

筆者の考察では、*V-sa kerak* は、話し手がその命題を真であると考えている場合に用いられる形式であり、かつ主観性の度合いが高い形式である、と考える。後接要素に着目して、その根拠を述べる。

まず、3.2.2 節で述べた、*V-sa kerak* に文末小詞 *=da* [強調] と *=a* [確認] の後接があり、*=mi* [疑問] の後接がないという点について述べる。*=da* [強調] は、Bodrogligeti (2003:

1019-21) によれば、「主語が定動詞による動作を行う必要性を強調する」、「話者が事態を必然的である、疑問なしに正しい、絶対に必要であるものと捉えている」ことを表すとされている。したがって、=*da* の前に位置する事態は、話し手にとっては真である命題を含むと言える (cf. (27))。=*a* [確認] も、話し手の判断を相手に確認するために用いられる。したがって、=*da* と同様、=*a* の前に位置する事態は、話し手にとって真である命題を含むと言える (cf. (28))。=*V-sa kerak* が話し手にとって真である命題を表すなら、=*mi* [疑問] が後接しないことも説明ができる。3.2.2 節で述べたように、=*mi* は諸否疑問文に用いられる。(31) は、発話時点では聞き手が来るかどうか、話し手にはわからない。

(31) *Siz kel-a=siz=mi?*

2PL come-NPST=2PL=Q

「あなたは来ますか？」(Bodrogligeti 2003: 1015)

したがって、話し手にとって真であると判断された命題には、聞き手に真偽を問う必要がないため、=*V-sa kerak* には=*mi* が後接しないと言える。

次に、3.2.1 節で述べた、=*V-sa kerak* にコピュラ要素の動詞の後続がないということについて述べる。テンスの点からいえば、=*V-sa kerak* は、時制の変化がなく、過去の推測を表すことができないことから、常に話者の発話時の心理を表すため、主観性の度合いが高いと言える(主観性については 2.2 節を参照されたい)。=*bo'ʻl-* を用いて従属節として用いられないことも、=*V-sa kerak* が話者の発話時の心理を表していることに起因していると考えられる。したがって、=*V-sa kerak* は主観性の度合いが高いと言える。

以上で =&i>V-sa kerak は、その命題が真であると話し手が考えている場合に用いられる形式であり、かつ主観性の度合いが高い形式である、と考察した。一方、=*V-(i)sh mumkin* は、話し手はその命題が真であるか偽であるかは表さずに、その命題が起こりうる可能性のみを表す形式であり、かつ主観性の度合いが低い形式である、と考える。

まず、3.2.2 節で述べた、=*V-(i)sh mumkin* には文末小詞=*da* [強調] と =*a* [確認] の後接がなく、=*mi* [疑問] の後接があるという点について述べる。これは、=*V-(i)sh mumkin* が、=*V-sa kerak* のように、発話時に話し手自身がその命題を真だと考えているわけではないことに起因すると考えられる。先述したように、=*da* あるいは =*a* の前に位置する事態は、話し手にとって真である命題を含むと言える。=*V-(i)sh mumkin* に=*da* あるいは =*a* が付かないということは、=*V-(i)sh mumkin* は、その命題が話し手にとって真であるということを表していないのだと考えられる。他方、=*mi* は後接可能である (30)。このことから、=*V-(i)sh mumkin* は、聞き手に真偽の判断をゆだねることができるため、話し手にとってその命題が真偽両方である可能性を表すと考えられる。

次に、3.2.1 節で述べた、コピュラ動詞 *e-* あるいは *bo'l-* の後続について述べる。3.2.1 節では、*V-(i)sh mumkin* にコピュラ動詞の過去形 *edi* が後接することで、過去の推測が表されている例 (25) と、*V-(i)sh mumkin* にコピュラ動詞の過去形動詞 *bo'l-gan* が後接することで、*V-(i)sh mumkin* が連体節述語として機能している例 (26) を挙げた。前者の「コピュラ動詞の過去形 *edi* が後接する」という点は、話者の発話時の心理を表さなくともよいため、*V-(i)sh mumkin* は主観性が高い表現であるとは言えない。後者の「コピュラ動詞の過去形動詞 *bo'l-gan* が後接することで、*V-(i)sh mumkin* が連体節述語として機能している」という特徴も、話者の発話時の心理を表さなくともよいという点から、*V-(i)sh mumkin* の主観性の程度が低いことの証左であると言える。したがって、*V-(i)sh mumkin* の主観性の度合いは、*V-sa kerak* と比べて低いと言える。

本節をまとめると、次の通りである：*V-sa kerak* は、話し手はその命題を真であると考えていることを表し、かつ主観性の度合いが高い。一方、*V-(i)sh mumkin* は、話し手にとってその命題が真偽両方である可能性を表し、かつ主観性の度合いが低い。

4. 聞き取り調査

本節では、2種類の聞き取り調査を行う。4.1 節では、両形式がある命題が真でも偽でもある可能性を表せるのかどうかという観点から、真偽 2 つが並列した命題を持つ文を日本語からウズベク語へ翻訳してもらう (全 6 例) という調査を行う。4.2 節では、蓋然性の観点から、ある文の副詞を固定し述部を入れ替えたのちに、容認度を判断してもらうという調査を行う。インフォーマントは、ウズベク語母語話者 1 名 (1989 年生、男性、タシケン ト市出身) である。

4.1. 真偽 2 つが並列した命題を含む文の翻訳

本節では、日本語の「だろう」と「かもしれない」の差異について分析・考察している三宅 (1992, 1995) を参考にして調査を行う。三宅 (1992, 1995) では、下記の 3 つの場合に、「だろう」が許容されず、「かもしれない」のみ許容されるという。①同時に真であることができない命題: 「明日は雨が降るかもしれないし、降らないかもしれない。」②話し手の信念では真 (偽) だが、実際は偽 (真) である可能性もある命題: 「それは嘘かもしれないが、私は本当だと思う。」③話し手がコントロール可能な動作を行うことを聞き手に報告する場合: A 「明日も電話してくれる？」 B 「明日は電話しないかもしれない」これらの結果から、「かもしれない」は、1 つの可能性として命題が真であるとの認識を表すと結論付けている。つまり、「かもしれない」は、命題が真偽両方である可能性があるという認識を表すと言える。

本稿での調査は、①～③の日本語文を提示し翻訳してもらったのちに、述部を入れ替

えて、その文が許容されるかどうかを尋ねるといった手順で行った。①～③の日本語文は全て *V-(i)sh mumkin* で翻訳されたが、*V-sa kerak* に入れ替えたところ、全て非文だと判断された。

(32) ①「明日は雨が降るかもしれないし、降らないかもしれない。」

- a. *Ertaga yomg'ir yog'-ish-i ham mumkin, yog'-maslig-i ham mumkin.*
 tomorrow rain rain-VN-3.POSS also possible rain-VN.NEG-3.POSS also possible
- b. **Ertaga yomg'ir yog'-sa-ø ham kerak yog'-ma-sa-ø ham kerak.*
 tomorrow rain rain-COND-3 also necessary rain-NEG-COND-3 also necessary

(33) ②「それは嘘かもしれないが、私は本当だと思う。」

- a. *Bu yolg'on bo'l-ish-i ham mumkin, lekin men rost deb o'yla-y=man.*
 this lie be-VN-3.POSS also possible but 1SG true QT think-NPST=1SG
- b. **Bu yolg'on bo'l-sa-ø ham kerak, lekin men rost deb o'yla-y=man.*
 this lie be-COND-3 also necessary but 1SG true QT think-NPST=1SG

(34) ③ A「明日も電話してくれる？」 B「明日は電話しないかもしれない」

A: *Ertaga ham telefon qil-a=san=mi?*
 tomorrow also telephone do-NPST=2PL=Q

- B: a. *Ertaga telefon qil-maslig-im mumkin.*
 tomorrow telephone do-VN.NEG-1SG.POSS possible
- b. **Ertaga telefon qil-ma-sa-m mumkin.*
 tomorrow telephone do-NEG-COND-1SG possible

以上の結果より、*V-(i)sh mumkin* は1つの可能性として真であるということを表すが、*V-sa kerak* は可能性を表すわけではない、と言える。

4.2. 副詞を固定し述部を入れ替えた文の容認度調査

2.1 節 (16) の「推量・疑念 *V-sa kerak* 「～だろう」 > 可能性 *V-(i)sh/V-maslik mumkin* 「する／しないかもしれない」」から、*V-sa kerak* のほうが *V-(i)sh mumkin* よりも高い蓋然性を表すことが予想される。本節の調査では、まず、高い蓋然性を表すとされる *V-sa kerak* をインターネット検索し、蓋然性に関わる副詞が共起している例を探す。次に、その例の

V-sa kerak を *V-(i)sh mumkin* に置き換えて、母語話者に容認度を尋ねる。

(35a) に高い蓋然性を表す副詞の例を、(36a) に低い蓋然性を表す副詞の例を挙げる。下線部は副詞を指す。(35a) では、高い蓋然性を表す副詞 *shubhasiz* 「間違いなく」と *V-sa kerak* が共起している。

(35) a. *Har qanday o'qituvchi uchun, shubhasiz bu eng qiziq*
 every how teacher for doubtless this most interesting

masala bo'l-sa-o kerak.

issue be-COND-3 necessary

「どんな先生にとっても、間違いなく、これは最も面白い問題だろう」

(<http://marifat.uz/marifat/ruknlr/umumii-urta-talim/3535.htm>

[最終閲覧日: 2022/09/20])

(36a) では、低い蓋然性を表す副詞 *balki* 「おそらく」と *V-sa kerak* が共起している。

(36) a. *Balki katta bo'l-ib ona-m-ni qadr-i-ni yaxshi-roq*
 maybe big be-CVB.PFV mother-1SG.POSS-GEN value-3.POSS-ACC good-COMP

bil-a boshla-gan-im sabab bo'l-sa-o kerak.

know-CVB.IPFV start-PTCP.PAST-1SG.POSS reason be-COND-3 necessary

「おそらく私が大きくなって母の価値をよりよく知り始めたことが原因でしょう。」 (<https://mobile.twitter.com/nizomuddinova02/status/1539284436327489536>

[最終閲覧日: 2022/09/20])

次に、(35a) と (36a) の *V-sa kerak* を *V-(i)sh mumkin* に入れ替える。(35b) は非文であるとインフォーマントが判断し、他方、(36b) は許容された。したがって、*V-(i)sh mumkin* は高い蓋然性を表す副詞 *shubhasiz* 「間違いなく」とは共起しないが、低い蓋然性を表す副詞 *balki* 「おそらく」とは共起できると言える。

(35) b. *... *shubhasiz bu eng qiziq masala bo'l-ish-i mumkin.*
 doubtless this most interesting issue be-COND-3 possible

[意図した読み: (前略) 間違いなく、これは最も面白い問題だろう]

- (36) b. *Balki ... sabab bo‘l-ish-i mumkin.*
 maybe reason be-COND-3 possible
 「おそらく (中略) 原因かもしれない。」

以上の結果より、*V-sa kerak* が高い蓋然性を表す副詞も低い蓋然性を表す副詞も共起するのに対し、*V-(i)sh mumkin* は高い蓋然性を表す副詞とは共起せず、低い蓋然性を表す副詞とのみ共起することが明らかとなった。

4.3. 考察

本節では、4.1 節と 4.2 節で述べた聞き取り調査における結果の分析をまとめ、両形式の差異について議論する。

表 3 に分析結果をまとめる。「相反した並列命題の翻訳」では、並列された命題の述部は、*V-sa kerak* で翻訳されず、*V-(i)sh mumkin* で翻訳される ((32) ~ (34))。「副詞との共起」では、*V-sa kerak* は高低どちらの蓋然性を表す副詞も共起可能だが ((35a), (36a))、*V-(i)sh mumkin* は低い蓋然性を表す副詞しか共起できない ((35b), (36b))。

表 3: 聞き取り調査における分析のまとめ

形式	相反した並列 命題の翻訳	副詞との共起	
		低い蓋然性	高い蓋然性
<i>V-sa kerak</i> [V-COND necessary]	×	○	○
<i>V-(i)sh mumkin</i> [V-VN possible]	○	○	×

V-sa kerak は、相反した並列命題では当該の形式が用いられないということから、話し手が真であると考えている命題に用いられると言える。したがって、共起しうる副詞の蓋然性の度合いの高低には特に制限がないと考えられる。

他方、*V-(i)sh mumkin* は、相反した並列命題では当該の形式が用いられるということから、命題が真偽両方である可能性を表すことが明らかとなった。*V-(i)sh mumkin* は、その命題が偽である可能性も常に考慮に入れているため、低い蓋然性を表す副詞のみが共起を許すと考えられる。

5. 考察のまとめ・結論

V-sa kerak と *V-(i)sh mumkin* それぞれについて、本稿での分析と考察をまとめ直し、結論を述べる。

まず、*V-sa kerak* について述べる。コーパス調査、特に後接形式について言及している 3.2 節において、*V-sa kerak* には文末小詞 =*da* [強調] と =*a* [確認] の後接があり、=*mi* [疑問] の後接がないことと、コピュラ動詞の後続がないことが明らかとなった。文末小詞 =*da* [強調] と =*a* [確認] は、その意味的な特性から、話し手が真であると考えている命題を含む事態に接続しうる。つまり、*V-sa kerak* は話し手が真であると考えている命題を表すと言える。他方、=*mi* [疑問] は、聞き手に真偽を尋ねるときに用いられる。*V-sa kerak* が、話し手が真であると考えている命題を表すとすれば、*V-sa kerak* に=*mi* [疑問] が接続されないことも説明できる。*V-sa kerak* にコピュラ動詞の後続がないのは、*V-sa kerak* に時制の変化がないこと・*V-sa kerak* が従属節として用いられないことを意味する。これは、*V-sa kerak* が「発話時の話し手による判断」を表す、つまり主観性の度合いが高い表現であることの証左となる。

真偽 2 つが並列した命題を含む文の翻訳調査 (4.1 節) において、*V-sa kerak* が相反した並列命題の翻訳では用いられないことから、*V-sa kerak* は、その命題が真偽両方である可能性を表すわけではない、ということが明らかとなった。したがって、*V-sa kerak* は、話し手がその命題を真だと判断していると考えられる。副詞を固定し述部を入れ替えた文の容認度調査 (4.2 節) では、高い蓋然性を表す副詞も低い蓋然性を表す副詞も共起しうることが明らかとなった。なぜならば、*V-sa kerak* では、話し手の主観によって、蓋然性の高低が選択可能となるためだと考えられる。

以上の考察より、*V-sa kerak* は、話し手がその命題を真であると判断している場合に用いられる形式であり、かつ主観性の度合いが高い形式である、と結論付ける。この形式は、蓋然性の度合いが高い副詞とも低い副詞とも共起が可能である。

次に、*V-(i)sh mumkin* について述べる。コーパス調査、特に後接形式について言及している 3.2 節において、文末小詞 =*da* [強調]、=*a* [確認] は後接しないが =*mi* [疑問] は後接しうることと、コピュラ動詞が後接しうるということが明らかとなった。先に述べたように、文末小詞 =*da* [強調] と =*a* [確認] は、その意味的な特性から話し手が真であると考えている命題を含む事態に接続し、=*mi* [疑問] は、話し手が疑問点を提示するときに用いられる。したがって、*V-(i)sh mumkin* は、話し手にとってその命題が真偽両方である可能性を表すと言える。コピュラ動詞の過去形 *edi* が後接するという点と、コピュラ動詞 *bo'l* を基にした形動詞過去 *bo'l-gan* が後接することで、*V-(i)sh mumkin* が連体節述語として機能しているという点から、*V-(i)sh mumkin* は発話時の話し手の心理を表すわけではないことが明らかとなった。したがって、*V-(i)sh mumkin* の主観性の度合いは、*V-sa kerak* と比べて低いと言える。

真偽 2 つが並列した命題を含む文の翻訳調査 (4.1 節) において、*V-(i)sh mumkin* が相反した並列命題の翻訳で用いられることから、コーパス調査にて行った考察と同様に、*V-(i)sh*

mumkin は、話し手にとってその命題が真偽両方である可能性を表すと言える。副詞を固定し述部を入れ替えた文の容認度調査 (4.2 節) では、高い蓋然性を表す副詞とは共起せず、低い蓋然性を表す副詞とのみ共起しうることが明らかとなった。*V-(i)sh mumkin* は、話し手にとってその命題が真偽両方である可能性を表すために、高い蓋然性を表す副詞とは共起できないと考えられる。

以上の考察より、*V-(i)sh mumkin* は、話し手にとってその命題が真偽両方である可能性を表す場合に用いられる形式であり、かつ主観性の度合いが低い形式である。この形式は、蓋然性の度合いが低い副詞とのみ共起が可能である。

6. 終わりに

本稿では、事態に対する話者の判断を表す、ウズベク語の *V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* という 2 形式について、両者の形態的特性に連動する意味的特性 (主観性) を明らかにし、主観性の度合いとは異なった観点 (蓋然性) から、意味的特性を明らかにした。

主観性の度合いの観点で言えば、*V-sa kerak* の方が高く、*V-(i)sh mumkin* の方が低いことを明らかにした。*V-sa kerak* の 3 つの特徴 (1. 過去のテンスで用いられないこと、2. 連体修飾節の述語として用いられないこと、3. 諾否疑問を表す *=mi* が付かないこと) が主観性の高さに連動している。一方、*V-(i)sh mumkin* は、*V-sa kerak* とは逆の特徴を持つ (過去のテンスで用いられる、連体修飾節の述語として用いられる、*=mi* が付されうる)。すなわち、*V-(i)sh mumkin* は、主観性の度合いが低い表現であると言える。

蓋然性の観点で言えば、*V-sa kerak* は蓋然性の高低に関わらず様々な副詞と共起できるが、*V-(i)sh mumkin* は低い蓋然性を表す副詞としか共起しないことを明らかにした。*V-sa kerak* が広い蓋然性をカバーすることから、風間 (2011) から示唆されたスケール (2.2 節; (16)) に疑義を投げかける結果となった。

最後に今後の課題を述べる。本稿は、ウズベク語のモダリティ体系の解明を目指すための端緒である。そのためには、本稿に関連する次の a. ~ c. の解明を進める必要がある: a. 確言と推量の差異 (cf. (16)): *V-(i)sh kerak* [V-VN necessary] 「~はずだ」 vs. *V-sa kerak* 「~だろう」、b. 可能形式が表せる意味範囲: *V-a/-y ol-* [V-CVB take] vs. *V-(i)sh mumkin* etc.、c. 文末小詞が持つ機能。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP22J01538 の助成を受けている。

本稿は、日本語学会第 165 回大会 (2022 年 11 月 12 日土曜日、Zoom によるオンライン開催) にて発表した内容を大幅に修正・加筆したものである。発表時にコメントをくださ

った方々、調査に協力してくださったインフォーマントの方に、それぞれ深く感謝を申し上げます。ただし、本稿における誤りはすべて筆者に帰するものである。

略号一覧

-		接辞境界	NEG	negative	否定
=		接語境界	NPST	nonpast	非過去
1, 2, 3		各 1, 2, 3 人称	PASS	passive	受身
ABL	ablative	奪格	PAST	past	過去
ACC	accusative	対格	PL	plural	複数
ADJLZ	adjectivizer	形容詞化	PN	personal name	人名
CAUS	causative	使役	POSS	possessive	所有
COND	conditional	条件	PROG	progressive	進行
CONF	confirmation	確認	PROP	propriative	～持ちの
CVB	converb	副動詞	PTCP	participle	形動詞
DAT	dative	与格	QT	quotative	引用
EMPH	emphatic	強調	SEQ	sequential	継起
GEN	genitive	属格	SG	singular	単数
INF	indefinite	不定	VN	verbal noun	動名詞
LOC	locative	与格			

参考文献

- Abdurahmonov, G'. A. va Sh. Sh. Shoabdurahmonov, A. P. Hojiyev (1976) *O'zbek tili grammatikasi II-tom Sintaksis*. [ウズベク語文法 第 2 巻 統語論] Toshkent: O'zbekiston SSR "Fan" nashriyoti.
- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- 日高晋介 (2013) 「ウズベク語：補遺データ (受動表現, ヴォイスとその周辺, モダリティ) (データ)」『語学研究所論集』18: 467–85.
- 風間伸次郎 (2011) 「まえがき—テーマ企画: 特集「モダリティ」」『語学研究所論集』16: 29–55.
- 金田一春彦 (2004) 「不變化助動詞の本質 —主観的表現と客観的表現の別について—」[初出: (1953) 『国語国文』22(2): 1–18, 22(3): 15–35.]
- Kononov, Andrej N. (1960) *Grammatika sovremennogo uzbekskogo literaturnogo jazyka*. [現代標

準ウズベク語文法] Moskva, Leningrad: Izdatel'stova akademii nauk SSSR.

三宅知宏 (1992) 「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢 日本学篇』
26: 35-47.

_____ (1995) 「カモシレナイとダロウ — 概言の助動詞③ —」宮島達夫・仁田義雄編
『日本語類義表現の文法 (上)』東京: くろしお出版. 197-200.

中嶋善輝 (2015) 『簡明ウズベク語文法』大阪: 大阪大学出版会.

Palmer, F. R. (1983) *Semantic Explanations for the Syntax of the English Modals*. Heny, F. and B.
Richards (eds.) *Linguistic Categories: Auxiliaries and Related Puzzles. Volume Two*. Dordrecht,
Holland: D. Reidel

_____ (1986) *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.

澤田治美 (2006) 『モダリティ』東京: 開拓社.

Web コーパス

Turkic web-Uzbek <https://www.sketchengine.eu/uzwac-uzbek-corpus/> [最終閲覧日: 2022/09/23]